

## 現実世界からの逃走

### ——離人症状の分類と回避傾向の関連について

金山 範 明

名古屋大学大学院環境学研究科  
日本学術振興会特別研究員

大 隅 尚 広

名古屋大学大学院環境学研究科

大 平 英 樹

名古屋大学大学院環境学研究科

#### 問題と目的

我々はしばしば、嫌悪的な出来事や感情から目をそらし、実際には回避不可能な現実から逃避することがある。離人現象は主に急性ストレス障害、パニック障害など過度の脅威を認知したときに起こる現象で、「自分の精神過程または身体から遊離して、あたかも自分が外部の傍観者であるような」感覚に特徴付けられるものである (American Psychiatric Association, 1994)。精神疾患の分類としては解離性障害の下位分類に位置づけられているが (American Psychiatric Association, 1994)、上記のように大きな脅威を感じた時に起こる症状であると考えられ、トラウマに対する防衛的な機能を持っていると信じられてきた (Apitzsch, 1996)。実際離人症性障害の患者を対象に快-不快の感情価を持った刺激を呈示し、その際の皮膚コンダクタンス反応を検討した結果、快-不快に関わらず健康者に比べ反応が低下していることが確認されている (Sierra, Senior, Dalton, McDonough, Bond, Phillips, O'Dwyer, & David, 2002)。これは、トラウマに対する防衛反応に留まらず、感情反応に関する交感神経系の機能不全を表していると考えられる。よって離人体験の頻度の多さは、全般的感情反応の低下を予測すると考えられる。

一方、健常大学生における解離傾向の高いものに対して、嫌悪的な出来事を材料とし自由再生法による記憶検査を行った研究においては、解離傾向の低い群に比してコミッションエラーが有意に高まり、オMISSIONエラーには有意差がないことが見出されている (Candel, Merckelbach, & Kuijpers, 2003)。この結果は、解離傾向が防衛的に働き、嫌悪刺激を回避しているという説と一致しておらず、むしろ嫌悪反応への注意の高まりを示唆している。しかしこの差は、解離の中でも特に離人傾向と強い相関を示す空想傾向 (Merckelbach, Muris, & Rassin, 1999) によっては説明されないとし、解離の嫌悪刺激への注意の高まりが離人とは関連しない可能性があることを間接的に示している。

以上を総合すると、解離と嫌悪刺激への回避に関する知見は、解離という非常に大きな枠組みで論じられているた

めに錯綜していると考えられる。本研究では解離概念の中でも、離人尺度として高い妥当性をもって作成された Cambridge Depersonalization Scale (以下 CDS) を用い離人現象を捉え、現実感喪失や感情鈍磨による情動反応への受動的な回避として捉えられる離人現象と日常的なストレスに対する回避傾向、および情動反応の関連を明らかにすることを目的とする。他の離人尺度では3~5因子という比較的多くの低位因子数が仮定されているにも関わらず (Simeon, Guralnik, Gross, Stein, Schmeidler, & Hollander, 1998)、CDSに関しては明確な因子構造を示した研究は行われていないことを考慮し、本研究では第一にCDSの因子分析を行う。得られた主要な因子に関して、嫌悪刺激に対する回避と快刺激に対する接近を表した BIS/BAS Scale、および感情を Positive, Negative の2軸で測定する PANAS を用いて相関解析を行う。

#### 方 法

##### 調査対象者・調査期間

大学生を対象とし、授業内で質問紙を配布し回答を求めた。回答者は調査者より、回答が強制ではなくいつでも中断及び放棄することができることを伝えられた。大学生 339 名 (男性 186 名, 女性 150 名, 無回答 3 名, 平均年齢 20.00 歳 (SD0.25)) より有効回答を得、分析対象とした。調査実施期間は 2006 年 4 月であった。

##### 調査内容

質問紙の構成は以下の3つの尺度を、同時に配布し、各質問紙の注意事項をよく読んだ上で回答することを口頭で説明した。

1. Cambridge Depersonalization Scale (CDS; Sierra & Berrios, 2000)

DSM-IVにおいて解離性障害の下位カテゴリに属する離人症性障害において報告される体験項目 29 項目について、この半年間の間にどれほど体験したかに関して、その頻度を 0 (まったくない)~4 (いつも) の 5 件法により回答し、頻度に関して 0 (全くない) 以外に回答した項目に関して、その持続時間を 1 (数秒間)~6 (一週間以上) の 6 件法により回

答するもの。日本語に翻訳して用いた。

## 2. BIS/BAS Scale (Carver & White, 1994)

情動と行動を起動する動機づけシステムとして、Gray (1981) により提唱された behavioral inhibition system (BIS) と behavioral activation (approach) system (BAS) を測定する質問紙。各項目にどれほどあてはまるかを4件法で回答するもの。高橋 (2003) による日本語版を用いた。BASに関連する項目が13項目、BISに関連する項目が7項目、合計20項目。

## 3. Positive and Negative Affect Schedule (Watson, Clark, & Tellegen, 1988; 佐藤・安田, 2001)

情動反応に関する項目について、普段どれほど感じているかを1(全く当てはまらない)~6(非常によく当てはまる)の6段階で評価するもの。ポジティブな情動を表す項目、ネガティブな情動を表す項目がそれぞれ8項目ずつ、合計16項目。佐藤・安田 (2001) による日本語版を用いた。

## 結果と考察

CDSの全ての項目に関して、質問項目の特性上その得点が0である確率が高く、実際に度数分布を検討した結果からも以上のことが確認されたため、全ての項目に関して対数変換を行い、以下全ての分析に関して対数変換後の得点を用いた。CDSの29項目(頻度得点、持続時間得点の合計値)に関して因子分析を行った。解の推定法には、CDSの全項目が必ずしも正規分布に従っていないことを考慮し主因子法を用いた。因子間相関がないことは積極的に仮定できないため、プロマックス回転を適用し斜交解を求めた。固有値が1以上であることを基準に6因子解を採用し、各因子のうちCronbachの $\alpha$ 係数が.70に満たない因子に属する項目は削除し、また全ての因子に.40以上の因子負荷量を持たない項目を削除した結果3因子構造を示した。Table 1に回転後の因子パターン行列と各項目の共通性、および各因子の $\alpha$ 係数を示した。第1因子は、自分の動作感覚や身体感覚、嗅覚、および聴覚などの異常に関する記述が多く見られたため、『感覚異常』因子とした。第2因子は、主に現実感喪失の感覚を記述した項目で構成されているため、『現実感喪失』因子とした。第3因子は感情の鈍磨及び消失に関する項目によって構成されていることから、『感情鈍磨』因子とした。第1, 2因子に関してはそれぞれ Depersonalization, Derealization を表していると考えられるが、これは脳損傷例に報告されているように、身体感覚経路である頭頂側頭連合野、視覚経路である後頭側頭連合野に還元可能な現象であり (Sierra, Lopera, Lambert, Phillips, & David, 2002), 神経基盤を勘案しても妥当性のある症状分離であると考えられる。第3因子に関しては、離人症性障害において感情刺激に対する皮膚コンダクタンス反応の低下が報告されている (Sierra et al., 2002) ことから、生理基盤にも根拠を持った因子であると考えられる。よって以上の3因子は概念的にも妥当性を持った下位因子であると考えられる。しかし、調査が健常者対象であり合計得点の分布が負に偏っていることや、多くの項目が除外されていることなどから、

暫定的な結果であり今後の詳細な検討が望まれるところである。

因子分析によって得られた、内的整合性の保証された3因子に関して、各因子項目の合計点を各因子得点とし、BIS/BAS尺度及びPANASの各得点と相関係数を算出した (Table 2)。有意性の検定の結果、BIS得点とCDSの総得点及び『現実感喪失』因子 ( $r=.23$ )、『感情鈍磨』因子 ( $r=.18$ ) の間にそれぞれ1%水準で有意な正の相関が見られた。これは健常者水準での離人体験、特に現実感喪失は、嫌悪刺激への回避反応と中等度に関連し、感情反応を低下させることを示唆している。しかし、『感情鈍磨』因子との相関は有意ながら比較的小さい値であり、回避的な行動スタイルを取っていることで、感情反応が抑えられる頻度及び持続時間はそれほど増大しないことが示されていると考えられる。またPANASのNegative Affect得点に関しては、CDSの総得点及び全ての下位因子と有意な正の相関が見られ (第1因子から順に  $r=.29, .34, .32$ )、Positive Affect得点に関しては、『感情鈍磨』因子のみと有意な負の相関 ( $r=-.15$ ) が見られた。この結果は、離人体験頻度が高いものは、行動抑制的、回避的な動因を感じるものの、必ずしも嫌悪刺激からの回避に成功し、不快感情を抑制できているとは言えず、さらに『感情鈍磨』体験は小さいながらも快感情を奪う可能性を示している。

## 結論

健常者における離人体験は概して、不快感情の適切な回避であるとは言えないことが示唆された。また快感情を低下させる可能性も非常に小さいながら見られ、トラウマに対する防衛として働いているというよりは、うつや不安への危険因子となりうる機能不全である可能性が示された。将来的には、解離性障害、離人症性障害を持つ患者を対象に詳細な検討が望まれるところである。

## 引用文献

- American Psychiatric Association. (1994). *Diagnostic and statistical manual of mental disorder*. 4th ed.. Washington D.C: American Psychiatric Association.
- Apitzsch, H. (1996). Trauma and dissociation in refugee patients. *Nordic Journal of Psychiatry*, **50**, 333-336.
- Candel, I., Merckelbach, H., & Kuijpers, M. (2003). Dissociative experiences are related to commissions in emotional memory. *Behaviour Research Therapy*, **41**, 719-725.

Table 2 各CDS得点と他質問紙との相関係数

	BIS	BAS	PA	NA
CDS : 総得点	.23**	-.01	-.02	.33**
CDS : 感覚異常	.06	-.03	-.02	.29**
CDS : 現実感喪失	.23**	.01	-.08	.34**
CDS : 感情鈍磨	.18**	-.05	-.15*	.32**

\*\* $p<.001$  \* $ps<.01$

Table 1 CDS の因子分析結果 (主因子法, プロマックス回転)

項目内容	因子1	因子2	因子3	共通性	
<b>因子1: 感覚異常 <math>\alpha=.86</math></b>					
24 動いても、自分で動かしている感じがしないので、まるで自分がロボットであるかのような、自動的で機械的な感じがする。	0.74	0.04	0.00	0.57	
26 自分が考えていることが、それ自身で独自の生命を持っているかのように、自分から切り離されているように感じる。	0.68	-0.01	0.03	0.48	
20 手で何かに触れても、触れたという感じがわからないので、それに触っているのは自分ではないような感じがする。	0.66	0.02	-0.03	0.43	
27 自分に触らないと自分の体があること、あるいは自分が現実に存在することを確信できない。	0.64	0.11	-0.19	0.37	
22 自分の体の一部が傷ついたのに、まるで誰か他の人の痛みであるかのように感じるほど、その痛みから切り離された感じがする。	0.62	-0.04	0.00	0.36	
25 匂いをかいても、快、不快という感じがしない。	0.62	-0.09	0.20	0.49	
23 自分が自分の体の外側にいる感じがする。	0.61	0.10	-0.09	0.40	
28 例えば、おなかが空いた、のどが渴いたといった体の感覚がなくなったような気がするので、飲んだり食べたりしても、機械的な作業をしているかのように感じる。	0.48	-0.06	0.30	0.44	
29 慣れ親しんでいた場所が、まるで初めて見たような、見知らぬなじみのない所に見える。	0.46	-0.01	0.16	0.31	
11 (自分の声も含め) 聞き慣れた声が、遠くから響いてくるように聞こえる、あるいは、現実のものでないまぼろしのような感じがする。	0.41	0.24	-0.01	0.33	
<b>因子2: 現実感喪失 <math>\alpha=.79</math></b>					
1 ふと、自分が現実には存在しないかのような、あるいは世界から切り離されたかのような、妙な感じがする。	-0.07	0.82	-0.06	0.56	
2 自分の見ているものが、まるで絵や写真を見ているかのように、平面的に見える、あるいは、生き生きと感じられない。	0.07	0.55	0.08	0.41	
13 まるで、自分と外の世界との間にヴェールがかかっているかのように、自分の周囲が、自分から隔てられている、あるいは、現実でないような感じがする。	0.12	0.50	0.06	0.39	
3 自分の体の一部が、まるで自分のものでないかのように感じる。	0.29	0.49	-0.08	0.42	
10 自分が何か考えているという感じが全くなくて、自分が話しているときも、まるで自動機械がそのことばを発音しているような感じがする。	0.10	0.44	0.22	0.44	
<b>因子3: 感情鈍磨 <math>\alpha=.78</math></b>					
18 ふと、家族や親しい友人に対して自分がなんの親しみの情も感じていないことに気が付く。	-0.02	0.02	0.67	0.45	
21 例えば、親しい友人の顔や、なじみ深い場所といったものを心に思い浮べることができないような気がする。	0.16	-0.18	0.65	0.44	
9 泣いたり、笑ったりしているときでも、自分自身の感情が心に迫ってこない。	-0.17	0.31	0.55	0.45	
5 大好きなことをしているはずなのに、楽しさが感じられない。	-0.12	0.28	0.45	0.33	
	寄与率	0.36	0.08	0.07	(%)

Carver, C. S., & White, T. L. (1994). Behavioral inhibition, behavioral activation, and affective responses to impending reward and punishment: The BIS/BAS scales. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67**, 319-333.

Gray, J. A. (1981). A critique of Eysenck's theory of personality. In H.J. Eysenck (Ed.), *A model for personality*. Berlin: Springer-Verlag. pp. 246-276.

Merckelbach, H., Muris, P., & Rassin, E. (1999). Fantasy proneness and cognitive failures as correlates of dissociative experiences. *Personality and Individual Differences*, **26**,

961-967.

佐藤 徳・安田朝子 (2001). 日本語版 PANAS の作成 性格心理学研究, **9**, 138-139.

Sierra, M., & Berrios, G. E. (2000). The Cambridge Depersonalization Scale: A new instrument for the measurement of depersonalization. *Psychiatry Research*, **93**, 153-164.

Sierra, M., Lopera, F., Lambert, M. V., Phillips, M. L., & David, A. S. (2002). Separating depersonalisation and derealisation: The relevance of the "lesion method". *Journal of Neurology, Neurosurgery, and Psychiatry*, **72**, 530-532.

- Sierra, M., Senior, C., Dalton, J., McDonough, M., Bond, A., Phillips, M. L., O'Dwyer, A. M., & David, A. S. (2002). Autonomic response in depersonalization disorder. *Archives of General Psychiatry*, **59**, 833–838.
- Simeon, D., Guralnik, O., Gross, S., Stein, D. J., Schmeidler, J., & Hollander, E. (1998). The detection and measurement of depersonalization disorder. *Journal of Nervous and Mental Disease*, **186**, 536–542.
- 高橋雄介 (2003). Cloninger のパーソナリティ理論と精神病理的傾向との関連 東京大学教育学部総合教育科学科教育心理学コース卒業論文
- Watson, D., Clark, L. A. (1988). Development and validation of brief measures of positive and negative affect: The PANAS Scales. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54**, 1063–1070.

— 2006.5.24 受稿, 2006.9.24 受理 —

## Escape from Existence: The Classification of Depersonalized Experiences and the Relationship between Depersonalization and Avoidance

Noriaki KANAYAMA<sup>1,2</sup> Takahiro OSUMI<sup>1</sup> and Hideki OHIRA<sup>1</sup>

<sup>1</sup>Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University

<sup>2</sup>Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2007, Vol. 15, No. 3, 362–365

Depersonalization is considered to be elicited by traumatic stress, and is characterized by episodes of detachment or estrangement from one's self. Recently, this phenomenon was understood as a coping mechanism, reducing the impact of a traumatic event. But findings of previous empirical studies were not consistent, possibly because depersonalization has not been classified into more detailed, finer categories. In this study, we preliminarily investigated the classification scheme of Cambridge depersonalization scale using factor analysis, and the relationships between depersonalization and behavioral inhibition system (BIS). Results suggested that depersonalization might lead to reduced and maladaptive emotional responses.

**Key words:** depersonalization, avoidance, emotional response